

かかわり合いながら学びを深め、自らを高める生徒の育成
～新聞を活用する場面やアウトプットする場面を取り入れた授業を通して～

新潟市立五十嵐中学校

1 学校の概要

五十嵐中学校（生徒数 580 人）は、雄大な日本海を臨み、住宅街の中に位置する創立 46 年を迎えた歴史のある学校である。保護者・地域の方々の協力の下、活力溢れる教職員集団で、「知性・創造・協力」の教育目標の実現に向け、日々実践を重ねている。研究推進では、「校内研修」と「日々の授業改善の取組」が連動し、同僚性と協働性を発揮しながら推進できるように研究推進部員の役割を明確にして、組織的に活動している。

2 NIE 実践のねらい

（１）生徒の実態から

令和 5 年度，6 年度 NIE 実践研究校に指定され，まずは，全校生徒の新聞に対するアンケート調査を実施した。

1 新聞を定期的に購読していますか。	購読している	36%
	購読していない	64%
2 あなたの新聞を読む頻度はどれくらいですか？	ほぼ毎日	4.4%
	週に 1～3 回	7%
	月に 1～3 回	10.6%
	ほぼ読まない	78%
3 新聞等を通して世の中の出来事を家族や友人と話題にすることがありますか？	よくある	6%
	ときどきある	25.5%
	あまりない	21.1%
	ほとんどない	47.4%
4 あなたは，新聞等で得た情報や出来事について関心をもち，さらに調べたり，考えを深めたりすることがありますか？	よくある	5.2%
	ときどきある	17.6%
	あまりない	26.3%
	ほとんどない	50.9%
5 あなたは，新聞等で情報や知識を得ることがあなたの考えを広め，学びを深めることにつながると感じますか？	そう思う	36%
	思う	44.7%
	あまり思わない	12.5%
	ほとんど思わない	6.8%

「新聞などを通して世の中の出来事を家族や友人と話題にすることがありますか」「あなたは，新聞などで得た情報や出来事について関心をもち，さらに調べたり，考えを深めたりすることがありますか」の質問に対しての「よくある」「ときどきある」の割合が少なく，家庭や学校で新聞に触れたり，新聞から情報を得たりすることが少ない現状がある。一方で，「あなたは，新聞等で情報や知識を得ることがあなたの考えを広め，学びを深めることにつながると感じますか」の質問に対しては，「そう思う」「思う」の割合が 80%を超えており，新聞活用が学びを深めることにつながると感じている生徒

が多い。今年度の本校の NIE 実践にあたってのテーマを「授業等で積極的に新聞を活用し、さまざまなものの見方や考え方を養う」「NIE と図書館が連携し、新聞を閲覧する環境を通して世の中の出来事を把握する習慣を養う」とした。今年度の取組として、図書委員会の NIE タイムの実施や新聞活用を構想の中に盛り込んだ授業実践を行った。

3 本年度実践の概要

(1) 新聞コーナーの設置

日頃から新聞を身近に感じてもらい、少しでも手に取って、気になる記事を読むことに抵抗をなくすように工夫した。図書室の前にいつでも自由に閲覧できる環境を整え、生徒や教職員、誰でもいつでも気になる記事を読めるようにした。



(2) 委員会活動と NIE タイム

図書委員会では、NIE タイムとしてランチ時に放送で図書委員が選んだ記事を紹介する取組を行っている。図書委員が事前に選んだ記事をまとめ、放送で全校に流し、新聞への意識を高めている。また、図書室の前に図書委員が選んだ新聞記事を掲示し、教員や生徒が目を止めやすいように工夫している。



図書委員会から全校のみなさんへ連絡です。
図書委員会では、図書館前にある新聞の中から気になる記事を図書委員が定期的に紹介する活動をはじめます。どうぞよろしくお願いします。

私が紹介する新聞記事は熊対策の強化のために熊を捕獲できるように北海道東北地方知事会が国に要望したという内容の記事です。
熊による人身被害が過去最多になっていますが、熊を捕獲することに対して非難の電話が増えてきています。
このような否定的な意見に対し、改めて法に基づく捕獲であるということを国民に知らせるという行動はわかりやすくとても良いなと思ったので紹介しました。

この新聞以外にも図書館前には多くの新聞が並んでいるのでぜひ読んでみてください。

みました

図書委員の放送原稿

(3) 地震による津波発生における避難訓練

休憩時間に地震が発生し、なおかつ揺れが発生する前に速やかに安全行動を取り、余震と津波に備え自教室へ避難する訓練を行った。緊急地震速報を聞いて、安全確保の行動ができたかを振り返った後に防災学習の一環として、新聞記事を活用した。生徒は、新聞記事を読み、アンケートカードに地震・津波が起きた場合の行動についてわかったことを入力した。防災担当からは、地震が起きたら「まず自分の頭を守り、落下物から身を守ること。落ちてこない、倒れてこない場所に素早く身を寄せて、低く、頭

を守り、動かない姿勢をとること」が大切であることや「揺れが収まってから屋外に出て、海の反対側へ、できるだけ高い建物に避難すること」を伝えた。生徒は、新聞記事から「『強く揺れたらすぐに津波』と考え、沿岸や河口部にいたら迅速に離れることや海や川の反対側に避難し、できるだけ高い建物に逃げ込むことが重要であること」や「日本海側の新潟県では、直下型地震が多く、海域の断層も陸地に近い、警報音が鳴ってから揺れや津波の猶予がないため、揺れを感じたらすぐに行動に移すこと」を学んだ。

「新潟地震きょう 59 年」2023 年 6 月 16 日付け、新潟日報

「家の中で地震に遭ったら」2023 年 6 月 24 日付け、新潟日報



(4) 校内研修と NIE 実践

6 月に NIE アドバイザーである新潟附属新潟中学校校長の山本達也様をお招きし、研修を行った。研修では、NIE の教育的意義や新聞の授業での活用方法、模擬授業を行い、職員の NIE に対する知見を深めることができた。また、NIE と ICT の融合が教育的効果を最大限に発揮することも学ぶことができた。

8 月には、新聞検索機能を活用し、授業で活かせる新聞記事を検索・保存する研修を行った。ロイロノートの資料箱の機能を活用し、新聞記事を教科ごとのフォルダーに保存しておくことで、誰でもいつでも新聞記事を活用して授業づくりをすることができるようになった。一人一実践の授業公開を実施し、教科横断的な視点で新聞活用の授業改善に努めている。

9 月からは、一人一実践の公開授業を教職員で始めた。授業展開の工夫の一つとして「新聞活用」を盛り込んだ構想カードを作成し、授業公開を行った。2 年生の国語の授業では、標準語と方言の違いやそれぞれのよさを教科書や新聞を通して学ぶ授業を行った。また、3 年生の体育の授業では、ダンスの楽しさに関する記事からダンスの表現技法を学ぶ授業や環境新聞（保健体育）を作成し、発表する授業を行った。



6 月の研修



8 月の研修



2 年生の国語の授業

4 代表研究授業

(1) 3年1組 国語科 「誰かの代わりに」

(2) 単元の指導計画 (全5時間)

時	学習のねらい (◆) と主な活動内容 (○)
1	◆教科書本文を通読し、概要を把握することができる。 ○デジタル教科書の範読を聞きながら、分からない漢字や語句をチェックする。 ○大まかな内容をまとめる。
2	◆抽象的な概念を表す語の文脈上の意味を理解し、筆者の考えを読み取れる。 ○「自立」「独立」「依存」「支え合い」といった言葉の本文中での意味を、解説を聞いたり、仲間と協議したりしながら読み取る。
3	◆筆者の考えと新聞記事の内容を比較しながら読み取れる。 ○前時の続きで、教科書本文の内容を読み取る。 ○提示された3つの新聞記事を読み、筆者の考えとの共通点や相違点を理解する。
4 (本時)	◆課題作文の論題について、自分の考えをまとめ、深めることができる。 ○自分の考えを端的に表す言葉と、そう考える理由をカードに書いて提出する。 ○他の人の考えを見たり聞いたりして、自分の考えを修正する。
5	◆前時の構想(付箋)を基に、自分の言葉で課題作文を書くことができる。 ○カードの構想を基に、ロイロノートで作文を書き、提出する。

(3) 本時の計画 (4時間目/全5時間)

①本時のねらい

課題作文の論題「自分は社会の一員としてどのように生きていきたいと考えるか。」について、教科書や新聞記事の内容を基に自分の考えをまとめ、仲間の考えに触れることで、多面的・多角的に自身の考えを捉え直し、深めることができる。

②題材として使用する新聞記事

「社説：私も一言」2004年5月31日付け、新潟日報

「温かい作風 姿勢評価」2013年4月13日付け、新潟日報

「社説：きらきらキラリ」2018年4月15日付け、新潟日報

掲載日:2004年05月31日、面名:C10101、記事I

掲載日:2013年04月13日、面名:地区F、記事ID:N1J20130413_M001300100000000002

掲載日:2018年04月15日、面名:総合、記事ID:N1J20180415_M0005001000007003

(4) 生徒の実態

男子 20 人、女子 14 人の 34 人の編成である。教研式標準学力検査（NRT）の結果は学級平均 55.6 である。学習に前向きに取り組む生徒が多く、各種テストの結果を見ても、一定以上の学力を有している生徒が多い。

一方で、仲間との関わりの中で学びを深めることや、自身の思いを表現することを苦手としている生徒も多い。4 月から様々な場面でかかわり合いを仕組んだり、課題作文を多く課したりしているが、まだまだ成長の余地が残されている。

仲間と協働しながら、未知の社会をたくましく生き抜く力を育成するために、今後必要な指導・支援を見極めて実践していくことにする。

(5) 新聞活用の意図と目指す生徒の姿

本来は、教科書本文を読み、筆者の考えを参考にしながら自分の考えをまとめる活動を行う。従来の指導計画、指導内容を大きく変えずに、新聞記事の活用を目指す。社会、人間、生き方といった観点で書かれた新聞記事を提示する。そのことで、筆者の意見を強化したり、異なる視点を与えたりしていき、生徒の考えを広げ、深めていく。

(6) 授業の実際

全 5 時間の指導計画を立て、本時は 4 時間目として課題作文の論題について、自分の考えをまとめ、深めることをねらいとして授業を行った。前次まで教科書の内容と 3 つの新聞記事を読み、筆者の考えとの共通点や相違点を理解する授業を行った。研究授業では、新聞記事中に書かれている主張を読み取り、比較検討する中で自分の意見を推敲する授業を実施した。その中で、さまざまなものの見方や考え方を養うことを目的にした。

授業では、論題に対する自分の考えを端的に表す言葉、そう考える理由をロイロノートのカードに書いて提出する活動を行った。教科書の筆者に賛同する意見の生徒は黄色のカード、反対意見は赤いカード、新聞記事を活用した意見は青のカードに書き、ロイロノートの提出箱で一覧にしたときに見やすい環境を整えた。授業者は、提出されたカードを適宜紹介し、机間支援しながら考えがまとまらない生徒の支援をしたり、新たな刺激を与えたりした。また、他の生徒の考えを見て、周囲の生徒と自由に意見交換したり、ロイロノートの提出箱を共有し他の生徒の考えを自由に見る時間を設定したりして自分の考えを推敲する時間を設けた。

このような新聞活用の実践を通して、新聞の内容に関心をもち、かかわり合いながら学びを深め、自ら高める生徒の具現化ができたと考える。なお、研究授業後の協議会では、「教科書の文章や作文の課題が抽象的だったため、新聞記事で具体的な考え方や行動を考えやすくなった」「教科書だけでなく、新聞の記事を複数使うことで生徒は自然に多面的な見方ができた」という意見があがり、新聞活用の効果を実感できた。

生徒 A さんのカード（青色）より

「他人に頼る力と自分で生きる力を両立して身に付ける」

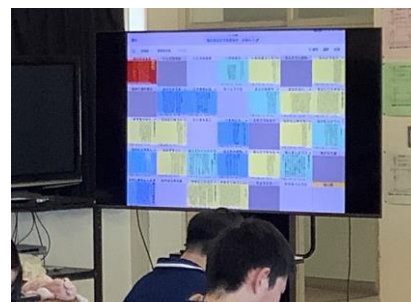
本文より「他人との支え合いが大事であり、誰かの代わりにやってくれるという安心感を持つ。」と書いてある。つまり他人に頼り、支え合う力が必要ということ。また、新聞記事の二枚目より「他人に頼りすぎる、安心感を持ちすぎることで社会全体が悪い方向に向く」と書いてある。つまり、自分で生きていくことも大切ということ。この

2つの力を、片方だけ取り入れるだけでは生きていけない場合がある。しかし、この2つの力を両立して生きていくことで、社会でよりうまく生きていくことができると思う。そして、この二つの力をバランスよく身に付けるべきだと思う。

生徒Bさんのカード（青色）より

「他人との差別化」 大平さんの新聞記事より

自分は、自分自身と他人を差別化することがこの先未来で大切だと考える。その理由は、大平さんが海外を拠点にして活動したことで新しい味方を見つけ、他の人には作れない唯一無二の作品をつくる賞を受賞したからだ。このことから自分にしかない視点、自分にしかない技術を持つことが大事なのではないだろうか。例えば入社試験で他の人より飛びぬけて話がうまかったり、タイピングの技術があったりして、頭が良かったりしたら試験官をしている人からしたら好印象だろう。だからこそ、学生のうちから自分の個性や特徴、長所を見つけ、自分が一番輝ける場所を見つけることが大事だと考える。



5 成果と課題

今年度は、図書室前に複数の新聞をいつでもだれでも読める環境を整えた。生徒や教員が気になった新聞を読んで授業や生活に役立てている。また、委員会活動や避難訓練等でも新聞を活用し、生徒にとって新聞を身近に感じてもらう工夫を全校体制で行った。各職員の授業では、国語の授業で標準語と方言の違いやよさを新聞記事から読み取る授業や保健体育の授業では、環境問題に関する新聞づくりと作成した新聞をもとにプレゼンテーションする授業にも取り組んだ。新聞記事そのものを活用したり、調べたことを新聞形式でまとめたりし、他の生徒と比較することで多面的多角的な見方や考え方を培うことができた。代表研究授業では、教科書の論説文と関係のある新聞記事を読み、自分の意見をまとめる授業を行った。この前の単元でも同じように教科書と新聞記事を活用した授業を行った。前の単元で、AIに関する論説文で教科書本文や新聞記事を活用して自分の考えをまとめる活動を行った。その際には、新聞記事を活用した意見が少ない状況であったが、今回の研究授業では、新聞記事を参考にして意見を述べた生徒が31人中14人と増えた。その要因の1つとして考えられるのが、新聞記事活用の授業に慣れてきたことがあげられる。教科書とどのように関連付けて自分の意見を練り上げていけばよいかを生徒自身が徐々にできるようになってきた。このことから、新聞を継続して活用していくことが重要であり、教科横断的な視点で全校体制で取り組むことにより効果が大きくなると考えられる。来年度に向け、職員全体が実践を積み重ねることで授業における新聞活用に教員も生徒も慣れ、さらなる教育効果をあげていきたい。（内山 雄太郎）